一統

（電話三番市外大塚局三百三十六番）
（全三十六年十月十五日發行統一第百二號　毎月一回十五日）

第百二號目要

○道德と信仰の調和（承前）……今成乾隨
▲久成佛の大慈悲……某虔寫
○思連記……故日達上人
▲品行に付問答。不動なる品性……
○日蓮大聖人（第十一回）……關田養叔
▲基教徒の書翰。清水梁山氏曰く……
○日什大正師傳、第一回……松尾忍水
▲五字のうた……老甫生
○敎文會舊八月の詩……忍水
▲窮衢の塵……鴎流舍主人
○壽量の文底……內藤智厚
▲本誌初號よりの主要なる目錄……
○本勝迹劣假名書……故日經上人
▲祝「統一」一百號等……
○椽側物語……有若無若

佛旗六金色御寺院御幕調進所六金色價表●唐縮緬製●●

種形別	並品製	上品製	新友仙	本友仙染抜
在家用	廿二錢	廿八錢	卅五錢	五十五錢
寺院用	四十三錢	五十錢	○	一圓三十錢
同極大	七十五錢	八十八錢	○	二圓二十錢

右外別大特大最大數種●國旗本友仙染抜四十五錢
御寺院用御幕●唐縮緬紫幕●天竺木綿及五郎丸白幕
京都市油小路魚棚南
御本山御用調進所
吳服商 高 高橋正意
（電話千二百八十七番）

團告

一金壹圓也　東京市牛込原町久成寺住職　田井日晃殿
一金貳圓五十錢　東京市淺草區柴久町十番地　涌井吉太郎殿
右本誌基本金の中へ御寄附相成正に領收候也
八月二十五日　統一團

御斷り

本月も發行遲延次號からは屹度定期に發行します
卅六年九月

統一編輯部

一本誌代金

不納の諸君は至急御送金ヲ乞

一雜誌交換、寄稿

共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢十二冊前金六十五錢郵券代用は一割增但五厘切手を其とす
一讀讀申込の節は住所姓名を階級にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂込濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅六年九月廿五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木曄學
印刷所　北澤活版所

發行所　東京市淺草區南松山町四十五番地　統一團

久成佛の大慈悲（其一）

某　虔　寫

我の佛を得てしより
經たる劫數量られど
幾萬億の阿僧祇か。
說法敎化常にして
無數に多き衆生をば
佛道に入れんとその爲に。
方便涅槃を現するも
實滅することなくて
此ところに法を說く。

我がもろ〳〵の神力は
近く住れども衆生には
見ゆることを得ざらしむ。
我れの滅度に衆生等は
廣く舍利をば供養して
戀慕渴仰の心懷せん。
衆生は既に信伏し
意質直柔に一心に
み佛を見んに身命かは。

續一主義

道德と信仰の調和（前號續き）

今成乾隨

第五回

調和の論據

予は兩君（道德家と信仰家）と知己を恭ふせるを以て、其の交際の愈々深厚ならんとを欲すると同時に、兩君の性行に就きて調和の光明を發見せんとに苦辛し、終に調和の論據を悟了せるやの感あれは、少しく之を述べん

感謝的報恩の行爲は自己の價値と正比例をなす

と云ふ一語なり

今之の意義を明瞭ならしめんが爲に、例を擧けて說明すへしコヽに卑賤なる人あり、惡漢之を侮辱せんとす、傍人之を見るに忍ひす、惡漢を抑制して卑賤の人を助く、玆に於て卑賤の人は傍人に對し、感謝の辭を述て去る、又コヽに貴顯の人あり、暴漢之に侮辱を加へんとす、傍人之を保護すると前の如し　貴顯は自已の位高きを自負し、一言の謝辭を述へすして去る　后數刻、貴顯自己の無禮を反省し、再ひ傍人のもとに行き、感謝の辭に添ゆるに千金を以てす

今斯くの如き事實ありとせんか、貴賤の差はあるも侮辱を免れたるは同し、然も一は謝辭に止まり、一は千金を添ゆ、是れ一見怪しむへきか如くにして怪むに足らす、自已の價値に於て其の等差同しからさるを以て、感謝的行爲に此の如きの差違を生したるを以てなり

今形式的皮相の見を離れて、內容的方面に向ひ、自已の價値の尊嚴なるを認識せるものは、本宗信徒に優るものあるへからす、何となれは人生の根本問題を解決し、無限絕大の大眞理に其の生命を乘托するを以てなり、然り而して自已か幾多の方面より恩德を感受するにも拘はらす、報恩即道德行爲を念頭に置かさるか如きとあらは、彼の貴顯の人か傍人に助けられて、而も身分の高きに自負し、更に一言の謝辭なくして去るか如し、之れ沒道理にあらすして何ぞや、宜しく猛省一番道德的行爲に力を盡すと、彼の貴顯の人の千金を添へ、且つ先の無禮を謝するか如くならさるべからす、是れ自已の價値に對する當然の責任なり、道德家は普通智識の範圍內に於て、知恩報恩の實行を現はしつゝあるは、吾人の稱讚する處なれとも、人心の裏面に伏在せる秘藏を開發して、廣大無邊の靈光あるを覺知せす、隨て現在の境遇に滿足して、本來の尊容を沒却し、僅かに人生の半面に於て、感謝的行爲に出つるは、猶ほ彼の卑賤の人か傍人に對し、一言の謝辭を述て更に

其の他に何の報酬を添ゆる能はざるか如し、されは道德家は進て信仰の光を發して自已の靈界を照らし、自已の位置を一轉して、高尚なることを自覺し、以て道德の源泉を開拓し、一層强大なる道德を行ひ、信仰家は自已の價値に相當する道德行爲に强めは兩者調和し、一身同体とあり、以て平和なる交際をなすを得へし、感謝的報恩の行爲は、自已の價値と正比例をなす、との言にして眞ならは思ひ半に過くるものあらんと茲に於て信仰家は、やゝ了解する處あるか如くなれとも、道德家は未た自已の卑賤なるを聞きて、疑を斷つ能はざるものゝ如し、故に予は更に話頭を進むるの必要を生したり

第六回

眞理の光明

凡そ人は自已の價値より高くして、且淨き行ひなかるへからす、而して自已の價値の絶大なるを認識するは無限絶大なる眞理の光明に攝取せられ、精神の皈着を了解し、以て安心立命するを最となす、眞理の光明とは他なし

南無妙法蓮華經の本尊是れなり

窃かに吾人生存の境界を觀察するに、無常遷滅にして憂悲苦惱多く、干涉束縛已むときはなく、不潔臭穢絶へさるに非すや、故に經には猶火宅と說く、されは何等かの光明を見さるに於ては、消極的の觀想を惹き起し、寧ろ生命を欲するは迷なりとの誤謬に陷り、河海に投身するものあるは事實に非すや然るに慧光無量にして壽命無數劫なる本佛（妙法の眞理と同体なる眞の佛）の聖訓を聞くに、本佛の境界は常往不滅にして娛樂快樂多く、自在無礙にして淸淨無垢なり、而もこの常樂我淨の德は、本佛の獨占にあらす、吾人の如き不完全なる生命にも、本來具有せるものにして、已顯未顯の差はあるも、其の本体に於て違ふことなし、本佛の大悲顯は本佛の境界と差等なからしめんとし、萬善萬德を妙法蓮華經の五字に結ひ、吾人に信仰すべきを說き給へり

故に吾人妙法を信念すれは、本佛の大慈悲大光明界に攝理せられ、凡身に即して佛身を發得し、娑婆穢土に即して寂光の淨土と感得するとを得ん、故に宗祖は妙法五字の光明に照されて、本有の尊形となる之を本尊と申なりと、判し給へり譬へは吾人の境界は太子の民籍に在りて、自已の血統を知らさるもるか、國王の慈訓によりて皇子となるか如く、佛子の凡夫となりて、本佛と遠ざかりしものか、本佛の慈敎によりて是眞佛子となる、吾か信する本尊は、磨ける玉の如く、吾人の心靈は磨かさる玉の如し、人、人を以て滿足するは、石に似たる王を以て、石ありとして滿足するか如く、人、佛とならさるへからすと云は、石に似たる玉を磨て、本來の光澤を發輝するか如し、無より有を生するに非す、無と思ひし誤解を捨て、本有の尊形となるにあり、而して是れ偏に本佛の本願力に乘托して、妙法の本濟力を待つの大信仰あるのみ、信

の一字は根本煩惱を切斷する利劍なり、生死の街路を照破する電燈なり、浮沈の苦海を濟度する汽船なり、眞理の光明を信すれは無限の生命を得て、絶大の價値を認知し、然らされは是れ死者に同し、豈啻に卑賤を以て許すを得んや

第七回

道德家の領解

道德家曰、予未た嘗て本佛の慈悲を知らす、隨て妙法の光明に接せす、徒らに棄佛破法の罪を犯し、而して自ら人を以て萬物の靈なりと信せり、然るに今法師の說を聞きて大に領解せる處あるを以て、今日以后直に妙法を信唱すへし、予の今日迄宗敎を非認したるは、自稱佛敎徒の猥りに吉凶禍福を說き、人道を無視せるものあるを以てなり、農業や養蠶をなすも、其の勞力と費用をはふき、信仰によりて收獲の多からんを欲し、商工業をなすに於ても、信仰によりて實利を得んと思ひ、養生を重せすして、無病健康ならんとを願ひ、以て宗敎の本義の如く說くを以てなり、宗敎果して斯くの如くなら は、公利公益を妨け、文明の發達を害するあらんを恐れたり、然るに佛陀の目的は斯の如き迷想にあらすして、吾人に最后の安心立命を與へ、人生の根本問題を解決し、眞理の光明により、頓證菩提の妙益を得せしむるにあり、予は爾后顯本法華の宗旨と信し、在來の迷信誤謬の徒を濟ひ、更に普通倫常に添ゆるに、眞の忠孝正義博愛なるものは、眞理の光明に同化するにあるを信せんとす、予の今日迄信仰家を排斥したるは、常識の方面に於て非難すへき點多々あるを知り、靈界の光明を認めさりしを以てなり、請ふ之を恕せよと云ふに至る

第八回

信仰家の懺悔

信仰家も亦懺悔して曰、予か學校時代に於ては、國民敎育を受け、普通道德の重んすへきを知りたるも、爾后本宗の敎化を受け、人生最后の目的は妙法を信仰するによりて達せらる故に信仰の妨害となる以上は、如何なるものをも犧牲に供せさるへからさるを聞き、普通の德義をも顧慮せさるに至る、然れとも今にして之を思へは誤解なりしなり、成佛の爲には妙法信仰の一念に余事を雜ゆるは、由々しき避事なりと雖、感謝報恩としては佛法僧の三寶の恩を報するのみならす、忠孝博愛等を實行せさるへからす、如何に末法無戒とは云へ、不忠不孝を進められたるにあらす、行者の絶へ難き出世間的戒行を禁止せるのみ、否成佛の方法としての一切の戒律は無益のみ、成佛問題に關係なき道義に於ては、人は人として、人の道を實行するは當然なり、特に現在吾の身の境遇は、受け難き人身と受け、遭ひ難き妙法に遭ひ、無限絶大の價値と認識したる以上は、吾を生み吾を養ひ給へる父母に對しては、世間普通の孝道に於ても、格段なる注意を致さゝるへから

す、又吾人は國土に統治せられ、同胞兄弟其の途に安するは全く國王の恩なり、特に我國の如きは、君民一家、萬國其比を見さるの國体なれは、何人と雖とも盡忠報國の大義を知らさるへからさるも、吾人は絶對善即自已の無限なる價値を認識せる以上は、普通國民よりも其の忠を致さゝるへからす、又相資相養は、社會の現狀にして、衣食住の如き、交通機關の如き、其の他百般の事物、皆社會の賜ならさるはなし、故に普通人と雖とも正義博愛の念なからさるはなし、況んや三世因果の連鎖により、互に不可離的關係を有し、而も自已の價値に鑑み、一層協心努力せさるへからす、予は以上の精神狀態に復活し、道德信仰並進て、過去に於ける教家の本領を失墜せるを購はんとすと

第九回

調和の圖解

予は喜はしきとの數多き中に、予か二人の知己の性行、相反するものが、互に觀喜の情を以て握手せるを見たるときより快なるはなかりき、依て將來に至るまて、此の喜を持續せんとを欲し　更に說を重ぬるに至る

人生究竟の目的は菩提(妙法の眞理と一体なる本佛の悟道)を證するにありて、之の境界に達するは信仰の一行あるのみ、智慧の高き天空の如くなるも、戒律の堅き金石の如くなるも、禪定の厚き地球の如くなるも、畢竟是れ凡夫の迷想に過す、唯偏へに自己の臆想分別を脫離して、本佛の慈悲に任せ、妙法を信行すると、尙赤子が悲母の乳を含むか如く、病者が良醫の藥を服する如く、草木の雨を得て自然花咲くか如くならさるへからさるも、更に又一轉して、自己の圖象即種々外界の補助を蒙れる幾多の恩德を感謝せさるへからす。今此の關係を明瞭にせんか爲、圖を以て之を示さん

信仰は絶對善即菩提に達する修行門にして、信念の一行に余事を雜へす、直に菩提に徹底する眞射的發動にして、道德は安心立命を發得したる隨喜の情抑へ難く、而して我か身の大利益を得たるは三寶の恩によるは勿論なるも、又全外界諸般の恩德によるとの觀念よりして、直に報恩的行爲となる、されは信仰の動機の益々强大なるに比して、愈道德行に出てさるへからさるを以て全く反射作用と云はさるへからす、されは信仰と道德とは、論理的に云へは前后あるも、實行方面より云へは同時なるを忘るへからす

この圖解にして誤なくんは、信仰と道德とい、決して衝突せさるのみならす、信仰を有する人は必ず道德を實行せざるらすと、信仰家の道德と非信仰家の道德とは、良し其の形式及び內容に於て、同一なりとするも、非信仰家は、自已の價値を知らすして、唯滔滔なる動機より生したる、醉生夢的の道德なれは、相對善に止まり、信仰家の道德は、無限なる價値を認識したる、高妙なる反射作用に刺擊せられて、湧起したるものなれは、絶對より來る相對善なり、故に有信仰の道德は、生命ある行動にして、無信仰の道德は器械的動作なり、されは有信仰の非道德家は、感謝報恩の行爲を顯はし、無信仰の道德家は信念の動機を刺擊して、互に有信有道の人たらんとを切望に絶へさるなり

第十回

兩君禮をなして去る

予か淺識なる圖解につきて兩君更に疑念の模樣なかりしか、益々隨喜の情に絶へさるもゝ如くなりしか、奇哉怪哉道德家は玉の如き容貌に一種云ふへからさる靈光を顯し、神聖犯すへからさる尊嚴を示し、道德家は尊嚴なる容貌に溫容玉の如き光澤を生したり、庭前の菊の花は靈光と放ち、本堂に唱ふる題目は大鼓に和し、微妙の天樂に聞こへ、寂然寂光土に住するの感あり左右に侍せる男女は合掌して題目に和し、兩君は禮をなして去る、予は自ら道德家と信仰家の調和を說き、而して今や自ら兩君に恥つる處あり、この上は唯本佛の加被力を以て自ら實踐躬行せんとを誓ひ、本尊の御前に進み

南無妙法蓮華經　と唱ふ

各面評論

○品行に付問答（僧侶の必讀を要す）

（佛耶兩教僧侶の品性）

○予は數日前偶然基督教徒と會合した、○彼曰く私は佛耶兩教の教義善惡の批較を爲し得る力はありませんが、しかし基督教々師の比較的品性の正いしのと之に反して佛教の僧侶が少しも品行が修まらないのを見て、之を以て其教義の善惡をも推知することが出來ると思ひます、○予曰く然らず佛教の眞の僧侶は基督教の僧侶よりも更に品性の正しいことを認めます、○彼曰くられでも佛教の僧侶の凡う九分までは其墮落が俗人の墮落よりも甚しいではありませんか、○予曰く开は我々が指す所の僧侶でないのです、彼曰く佛前に仕へ經を讀み寺に住し祈禱となし死者を引導す之れを僧侶と云はれますまいか、○予曰く僧徒の形式であります、あれは法衣を纏ひ袈裟を着したる俗人であります、佛前に禮拜するのは時計の針と同じです、讀經は無意義です蓄音器的です、寺に居るは墓守りです、祈禱は金錢の高下に應じます、葬式屋の番頭です、私はあれを僧侶とは申しません、あれは佛典信仰中から出た人ではない、あれは僧侶の形骸を示して居る商賈坊主で

す、佛法にあんなものゝふゑたのは黄金の價値が高いので人造金が出來たと同じです、人造金は黄金とは違ひます、人造金が出來たので黄金の價値には何等關係を持ちません、人造金は人造金、黄金は黄金です、佛法の僧侶は僧侶です、商賣坊主は商賣坊主です、人造金の出來る所以は黄金の貴重なることを示したのではありますまいか、まがい僧侶の出來たのはたま〳〵佛教眞の僧侶の神清なことを意味しますまいか、あんな僧形の虫が多く出來たのにも佛教うのものは頗る迷惑な次第であります○彼曰くうれでは現今の多數をしめてをる墮落の僧侶たちは佛教の教理は味はつたことなく教理を味はない位だから信仰は無論ないのでありますな、○予曰く左樣、しかし注意して置ます品性の脩りたる信仰の充溢せる眞の僧侶は確乎たる佛教々理を把持せる所に必ず存在せることを、○彼曰くなるほど、彼我の談話は是にて話頭を一轉したのであつたが、ひろかに予の心の内では嗟嘆の聲がさゝやいだ、なぜ予をして彼の多くの僧侶の品性と道德と信仰と正直等とを誇ることをさせないのであらうかと

○其價値如何

（僧侶の自覺を要す）

其價値如何と一考をしてもらいたい、而して自覺せられたる上での大自尊大自重を以て任ぜらるゝことは實によろこばしいのである、（記者曰く上の三行は故めりて執筆者と相談の上暫らく文字をふせたり）

○不動なる品性

（葬の品性をよろこばず）

唯熱に浮れたる信仰は余程あやふいものである、冷い所にあつい眞の信念のあるのは動かない　品性々々と云つても外面的に品性を保つは惡くはないとした所で葬の品性と云はねばならぬ、不品行を自覺した品性即ち不品行の境遇を打ち破つて來た品性は堅いものである、俗に云ふ「四十ぢしの道樂」に落入りやすいのは外と飾る品行である、

○基督教徒の書翰

（猪の金山は教義上ばかりの比論よわらざるべし）

左の書翰は予が知人の基督教信徒の某君が昨年十月中予のもとに送られたるものである、

拜啓今春は岡山市中人車雜踏の間別懇なる友人すら看すごしにして去り行くべき場合にもよく僕の名をよびて丁寧なる言辭をたれたまひ今回は又遙々統一雜誌御寄贈被下重々御厚情の至り拜謝の辭も無之不堪欣喜候貴君の如き宗教上の信念熱烈にして兼て文學上の造詣深奥なる人物は實に當世に稀れなる所敬服の至に堪へず候僕の如きは眞に井底の蛙何をもわきまへすさつば

り話になり不申十數年前ふとしたことよりキリスト教に觸接し今に信仰致居申候へ共何も別に深く研鑽の勞を積みたるわけにも無之甚慚愧の至に候只イエスキリストなる一人格により此自身を世に顯はし給ひし神は荏弱暗愚賤墮汚穢極まる僕の如きものをも憐みて罪惡の中より救出し光明清潔の靈界に入らしめ玉ひし一事實は忘れんとして忘るゝ能はず元來短氣にして怒り易く肉慾情慾と云ふ如き汚穢なる感情容易に制し得ざりしもの一朝イエスキリスト救濟の恩惠に浴し心氣平穏に歸し劣情洗ひ潔められしこと自分なから歡喜に堪へざる所に候

之を言ふは易く之を行ふは難しとは誰れも知る處宗教家の常に唱ふる高尚なる言語と其實際生活との一致せざることはゞ人をつまづかすものなしとドラモンド博士の言誠に其通りなりよし其人の信仰如何にあれ其人品高潔ならず其心事光明を欠き候ては只自ら欺くの一僞徒たるに過不申僕輩の自ら恐るゝ所茲にあり兄等に對し十分嚴敎を乞はんとする所茲にあり

僕輩佛敎の事は更に不知日蓮上人の說かれし所などにつきては毛頭不案内なりされど誠に朦朧なからに上人の高風を欣慕するもの也今日の如く僞善盛搆の多き世の中に立ちては至眞至誠疾風烈火の如き高風を羨望せざるを得ず此點につきては貴兄等諸君に向ひ望む所大なり願くは今後益々御奮勵其遺風を顯揚せられん事を云云

如何に此書が眞面目であるか、是れ彼教の人の手にかゝれたるものであるのだ、而も其教の信徒であるのだ、かゝる眞面目の筆が吾が僧侶の手からしば〳〵うの信徒のもとに運ばれているでおらうか、此手紙の主しは頗る眞摯なる人で、信仰も、品性も、頗る篤く正しき方である、かゝる人が吾が無上道と唱ふる所の僧侶にすら見難きことと慨嘆せなければならぬ、予は吾が教義の高きことを思ふと同時に、なぜそれ等の人の品性が定まらないのかと嗟嘆に堪へない、

○清水梁山氏曰く

（氏が本佛論に對する談片）

ふと梁山先生と邂逅した、雜誌鶏子吼の談をすると未だ見たことがないから一度見せて呉れとの事で早速持合せの十六、十七、十八の三冊を出した所、そこゝ繙いて居たのであるが、やがて口を開て曰く

○木村と云ふ人は余はぜまじめの人と思はれる

○日蓮本佛論、あれは余程の問題となつたらしい、

○私しの書いた日蓮本佛論ですかあれは善く讀んで呉れないから困る、あれは舊來誤つてをる興門一輩の徒に示した位なのだ、

○興門徒のは釋迦佛をおさえ込んで日蓮を本佛とするのであるが、之れは無論誤つてをる、私しのは一の學見として斯

くすれば日蓮本佛論も主張されると云ふ議論なので、從來の日蓮本佛論の辯論に對した積りなのです、私は無論釋迦本佛論です、尤も釋迦もたゞの釋迦ではありませんが……

○なるほど題を日蓮本佛論としたので……何分善く讀まないで早呑み込をするからね、

以上は座談中の談片に過ぎないけれど、これでも清水氏の本佛論に對する意向は解譯されるであらと思ふ（記者曰く座談中或は聽き誤りなきにしもあらず）（以上、闕末某）

願本之光

左の一書は、宗門有數の先哲寂光寺日達上人の著述にして、刱心行者の爲め極めて親切に臨終の要心を物せられたる好讀本なるが、未だ世に公刊せられたるを聞かず、予先年姫路妙立寺に在職の當時、信士桔梗儀三郎翁の許にて拔見せしことあり、昨冬施本にせんものと信士に招介して暫時の拜借を乞ひしに、今は手許に無きとの回答を得て遺憾やるせなかりしに、當春再び妙立寺野老學兄に依囑して、漸く轉展三宅家の秘藏となり居れるを嗅め、拜借謄寫の榮を得たり、而るに爾後予塵事に追忙として施本の宿志を果さゞりしが、偶々忍水居士の慫囑あり、施本の賞を要する方法を講するよりも「統一」紙上に公にするの可なるを認め、刱愛其需めに應ずることゝはなりぬ、言ふ迄もなく、轉輾謄寫の末上梓せしもの魯魚の誤なきにあらず、されど上人著述の意を害するの恐れあり、敢て文字に取捨を加へず讀者諒恕

恵日山主　山根顯道識

思連記

故本昌院日達上人　著作

はしがき

あら玉のとしたち歸るあしたより　思ひつらぬる事を書綴れば　硯に骨を折らせ墨をへらし筆を勞さするのみ　元朝の初日影に老若男女顔かたちをうつして見れば　若き思をなして歡ひあひつゝ　彼方此方へ走り廻りめでたき事ばかりを思なり　初午になれば男女寺へのぼせん事を思ひ　彼岸・涅槃會には過にし人々を思ひ、佛事供養のいとなみを思ひよう〳〵として　餘寒もうすくなれば　高きは野風呂花むしろなどの用意ありて遠山をおもひ　百姓は田かへし、苗代、麥の耕作など思ひ　ひなの節句、桃の酒　草餅のみ喰ふ事をおもひ　西山の東山のとて山々の花見せん事とおもひ　卯月八日は灌佛の產湯もらはん事をおもひ　此日より夏書、夏詣、立願をはじむる事をおもひ　眞菰會の聲に粽まかん事を思ひ　若葉しげりて九夏のあつき空には涼しき處をおもひ　瓜を冷して喰ん事をおもひ　七夕の夜は織女にきぬかさんことをおもひ　なき魂祭の土器賣の聲々呼びまわれは　上戸のひたいぼんの前のあつき事をおもひ、生御魂の親の心をおもひやり　八朔はたのもの禮儀を思ひ

ひ　三五の月に曇らぬ事をおもひ　菊かさねの酒に醉ん事をおもひ　まめの名月には畑の大豆ひかん事を思ひ　世の人思案分別は豆の葉のいろはぬうちと云ふにつけて　やゝ寒くなれば帷かさね着てありく人の形をおもふ　玄猪の御祝儀には手づから餅を拜領せん事をおもひ　藥師堂には百燈千燈の燈明を思ひ　法華宗には信心の志をおもひ　十夜を願ふ人は往生せん事をおもひ　霜降のあさじ詣りの群集の聲々に　おびへたる子をすかさん事をおもふ　かく何くれと思ふ程に　日積り月かさなりて今年も早や今一月になりぬ　あるにつけ無きにつけて一年中の東の月なればよろこびは少なく腹たつ事多き故に鬼月とは申すやらん　八日は釋迦如來の出山の日なり　今日本にてはむしつ講として出錢して豆腐汁喰ふ事になりぬ　十五日は釋尊の成道なされし御遠忌なり　此二日は佛家たるべきものは　御報恩をおもひ謝德をおもふべき筈なれども　その根元を思はすして世間の事わざになりはつるを思ひ　むねといたましむるのみ　心あらん人は此數々の思の字の中に　何れか大切なる恩ひありや　人間萬事塞翁が馬と云ふは　思ふ事の定りたる事をなげくな、悅ぶな、悲しむな、樂しむなと云ふ事なり　浦島太郎が千年も東方朔が八萬歳も　名のみのこりて今はなし　人一期長しと思ふとも　五六十年あまりにおよばぬ年月ぞかし　かゝる電光朝露のみじかきうき世にながらへんより　後の世の永き苦樂に浮き沈む事をおもふべし　いにしへ能因法師の姉君　としの暮にさま〳〵のものを弟の御房の方へ送らるゝ序に　初春のめでたく千年をのぶる歌ありや聞きたしとて　文こま〳〵とかきて送られける其返事に

後の世ときけば遠きにたれぞも
　しらずやにふもうの日なるらん

とありしかば　姉君はうき無常の事嫌ひなれば　やれ〳〵いま〳〵しやをぞましき歌やとて　其歌を火にくべよ捉捨よとて腹をたて　能因法師をのゝしりしかり給ふ處に　明れば元日の朝、鷄もなき四方のけしきもゆう〳〵として雜煮なぞすき屠蘇酒の盞はじまりける時に　隣の家に泣聲しきりなれば　人を遣はしてきかれけるに　究竟の若きもの俄に病に犯され死けるよし聞かれて　果敢なきうき世やと無常の志おこり　佛道修行いたされしと申傳へ侍るなり　されば善緣にひかれて佛になるおもひ　惡緣にひかれて奈落に沈むおもひ　これ二つより外に思ふ事の大切なるはなし　かの能因の姉の一首の歌を思ひあはする事の出來たるは　善知識の能因法師なりとておがまれしとなり　されば佛道修行するにつけては　まづ我身の佛になるようを習ひて　後に經々をならふべしと大師先德の仰せおかれしなり　うれ故に此本に成佛不成佛の思ひを連ねて記すと云

ふこゝろにて　思蓮記とは名づけたるなり

宗教文學

予れ六年ほど前に、はなぶさ生の名を以て日什上人傳記と題し本誌へ一回のみ掲げたる事ありしも多忙にまぎれて其儘に打過きたり、本第一回は其れと重復になるものあれど初讀者の便利をはかりて茲に掲載したり之を諒せよ（又前號に第一回とせしは誤りなり）

日什大正師傳

松尾忍水述

家系（第一回）

御父覺知、御母清玉姫のこと

大聖の御門弟六門跡、並に天目等の一流、みな法軌佛法共に大聖の化儀に背くところあるに依り同心せざるなり、直に日什は仰ひて日蓮大聖人に飯するところ也云云の置文をなして當に隠覆んとする顯本法華經卷相承の正脈を復活し給し。二位の僧都玄妙法印阿闍梨日什大正師の俗系を案ずるに、ろの先清和天皇の苗裔八幡太郎源の義家の末葉にして石堂氏なり、世々鎌倉の將軍家に仕へけるが、最明寺禪門の卒せし頃よりして執權北條家の專横やうやく增り遂には將軍はあれども無きが如く振舞けり、その頃石堂某と云へるは正しき武士にてありしかば北條が其の横曲りの驕奢るを見るに堪へずとて仕官を辭して奥州會津（岩代若松）の城北瀧澤に蟄居けり

某に刑部左衛門尉覺知と名くる一人の男子あり、父に劣らぬ好武士なるがこれ即ち日什大正師の父なる人なり。

こゝに當國會津の城主に從五位下葦名遠江守盛宗（西郡）と云へるは其先桓武天皇の後胤葦名光盛の子にして最廉直の大名なり、その季の女に清玉姫と云へるあり、天性て優にやさしく父母に事ゑて孝順さらに倦ことなかりければ何時とはなくして人の孝玉姫とは噂しあゑり、姫は斯く優しくして孝行あつきが上に容顏ことのほか勝れ、花の色いと麗はしく其頃比類あるべしとも見ゑず、この事いつか相模守高時の耳に入りて震へだてし遠見の櫻見ぬ妻にや憧がれけん、使者を盛宗の館につかはし書翰をもて云ふやうは貴殿の女清玉姫予が室に迎へ入ばやと存ず婚姻の禮儀はいと大なり貴殿許容るに於ては家門繁榮の基ならんとぞありける、盛宗讀み終りて思慮やう、今高時權柄をもて予に婚姻を求め之を許さば家門の繁榮と云ふこそ片腹いたけれ　武門は武功を以てこう封戸を得るを面目とすれ、予不肖なれども肉線を結びてなどか富貴を望まんや、家門繁榮の文句武家の禮儀とも思はれと　高時執權の高職にあればとて何ぞて女を遣はすべき、這は体よく謝絶するにしかじと使に向ひ、御懇意のほど吾家に過ぎたる貴命なれど承諾がたきことの候へ、女清玉には前に最早約束せる人あれば今いかにともせん術なしと答へたり、使者は不興顏にて歸りぬ。

扨は致し方もなきことなれども主人の瞋恚やふくまん。さはれ士君子の道今更に違約も致されまじとて不面目げに歸り去りぬ。

かくて盛家は石堂覺知こそ才學幷び備りて行末賴母しき若ものなりとて家臣の松木某をもて婚談をなさしめしに石堂にも異議なく承諾に及びければ、こゝに若松八千代松、をほる岩代苔むして何の世までも變りなき常磐の色の二本松、かたき赤緣は結はれぬ、この清玉姫そ師の御母にてありけるなり。

日蓮大聖人（第十一回）

佛城關田養叔講演

蓮長師は、時々京都の方へ出て、五條油の小路の書籍商天王寺屋淨本といふ者の家を訪ねて、廣く和漢の書物を御覽なされた、此の主の淨本といふは、至て實直で殊に親切なものでありまして、深く蓮長師の凡人でないといふことを信じ、非常に其の高德を慕ひ、妻の妙蓮と共に大層に歸依いたし、蓮長師が御出向の度ごとに、いとも懇ろに待遇申し上ます、夫れ故遂には京都へ御出ましの節は必ず此の家に泊りなす樣な譯に相成りました、かゝる不思議の因緣からして後年に及び淨本妙蓮の夫婦もろともに、大に法華經を信仰いたし御祖師樣の御弟子と相成り、淨本は宗祖の御入滅に先だつこと二年弘安三年九月十一日を以て沒しましたが、其の孫の通妙が淨本の邸宅を轉じて御寺といたし祖父母たる淨本妙蓮が眞く法華經を信仰したる紀念として、二人の名より一字づゝを取り本蓮寺と名づけ、後また永祿二年に故あつて本堯寺と改めました、

蓮長師は淨本夫婦が厚き待遇に依つて屢々京都に逗留をしながら、諸處の學者等と交際いたす中にもこの頃、臨濟の禪宗を引めて、後に聖一國師と云つて世に名高い普門寺の圓爾和尙と親しく交際を結び互に佛道の談論に往來を致しました が、圓爾和尙は蓮長師の學識博く才智秀れたるを感じて非常に尊敬をいたし、弟子等に向つても『期る豪傑の師にあらでは一切衆生を導くものとは成れ難い』と語つた位であつた。後に寛元年中に國爾和尙が九條關白道家公の本願に依つて、東福寺を建立するに當り、日ごろ親しく交際を致した緣故を以て、普請の祝賀として、大なる材木を一本寄附いたしましたが、この材木は柱となりて、現今でも東福寺の日蓮柱と稱へて世に名高く、この寺の萬年動かぬ寶物となつて居ります、

また此のころ、曹洞一派の禪を弘めた、道元禪師が聖興寺に居りましたので、此の人にも、親しく交りを結び議論を闘はした、

また支那から參つた禪僧で　道隆蘭溪和尚といふがあつた、この人は後には北條家の歸依を得て、鎌倉建長寺の開山となり大覺禪師といつて、隨分世に名高いことであるが、當時泉涌寺の來迎院に住して世の人の信仰一方ならなかつた蓮長師は、これを聞いて、是非この闇渓和尚に値ふて教を求ねんものと思ひ、且つは此の泉涌寺といふは、もと禪律、眞言、淨土の四宗兼學の山であるによつて、開基已來、支那から渡つた、經論なぞも澤山あるといふことを聞いて居るから、これ好き幸ひであると、直に道隆禪師の會下に參じて禪宗の教義を尋ね大に見性成佛の工夫を凝らし、傍ら唐土の佛法の有樣から其の外萬事の樣子を聞きなぞ致しまする……

日本の禪宗が渡つたのは、仁安三年の頃で、彼の京都の建仁寺を建立したる榮西禪師が初めて弘めたので、鎌倉時代には驅分流行したもので御座います、一躰この禪宗といふ宗旨は　楞伽經、楞嚴經等の經文の意に基いたもので、主に三界無一物なぞと云ふて空といふことを多く說き、チト毛色の變つた空にもつかない樣なことを云ひますが、この宗旨の起原だといふを聞けば御釋迦樣が、一切經を說いて終ふて跋提河の邊に於て御入滅を遊ばされやうとした時に、人天四衆から鳥獸蟲ケラに至るまで、最早これで佛樣と此の御分れであるといふので皆悲歎の涙にくれて居りました、此の時に御弟子の迦葉尊者も靑くなつて鷄足山の洞穴から飛んで來た……釋迦如來は寶棺の中に在して、一輪の華を拈つて大勢の者に見せたところが、人天大會誰れ一人この意を悟るものがない、スルと迦葉尊者ひとり顏の相好を崩して笑つた、笑ふ門には福來る此の笑つたのが大當りで……正法眼藏涅槃妙心……摩訶迦葉に附屬するといつて、大層六つかしい功能書の附いた悟りと佛樣から傳へられたといふのです、餘り眞面目では聞けませんが……是れより心を以て心に傳へ達磨大師までゞ二十八人になるといふので、これを西天の二十八祖と云ひ傳へて居る、これにも木に竹を接いたやうなチト受取れない語があるけれども……、夫れで宗旨の立て方が經文には依ない、文字は要らない、佛の說いた一切經は月を指す指の樣なもので月を見て終へば後は用はない、經論は丁度掻の濃を拭いた紙屑も同樣なもの、現虛の頂頭を蹈みつけて佛になるのだと罵つて居る、ある禪宗の祖師は、腕を出刄庖丁で切つて悟りを開いたといひ、或る禪僧は猫を殺して悟りを開いたといひ、又は佛像を薪にして燒いて悟りを開いた抔といふ位で、これを直指人心見性成佛と誇つて餘ほど奇妙奇手劣の宗旨である、蓮長師は、道隆禪師の會下に列り、此の面白不測な宗風に心を注き、大に禪機を養ひまする、

教文會　舊八月の詩

忍水

舊八月十五日(十月五日)品川に居を移す、予等日暮ごろ滝車にて袖ヶ浦々頭を南へ走る、明月はは(や)海ぞはより二間ばかり昇りてまだ空は明るけれどおぼろながら光を放てり、和歌あり

袖ヶ浦はせ行く窓にかゝりしは
白うす絹につゝもれし月

今年は天に曇なく和らかき光を一ぱいに放てり

み佛のみ姿と見し望の月
來る雁や月に便りの文づかひ
戸をあけて雪かと見しは月夜哉
滿月を誰が云ひうめし月の弓
盃の光嫦娥や詩の思案

十六夜は夜十時すぎ頃より月の病あり、新詩を得たり

月蝕

今宵十六夜の月の夜よ
下界の人は男も女も
はるみて仰ぐ天の空
何を語るか夜深まで
歡喜に似たる聲す也

あな不思議や這はいかに
ちりも止めぬ圓月の
光をかぐよ片端より
見る〳〵うちに月の女の
平和の顏を失ひぬ
下界のぞちは眉ひそめ
是れ月人の魔の爲に
食れしものか恐ろしや
あないたげなのことゞもと
あまたの人の叫びしに
その聲天にとゞきけん
月人力得たるにか
惡魔よはみを出せしか
又見るうちに細々き
光はもれて引出す
天の岩戸のそれならで
月の美人の容顏の
消ゑしが折のうれに似て
やうやく闇をのがれけり
下界に之を譬ふれば
いと窓ふかき姫御前の
戀になやみののちか又

雨中にいでし芙蓉かな
憂しと仰ぎし人の子は
うれしと見るまにこやさて
何を語るか元のごと
歓喜の聲に似たる也

舊八月七日(十月七日)萬朝報は傳へて曰く月の最もまろきは此の夜なりと、はせをの句に「いさよひはつかに間のはしめ哉」天文學ひらけし今の世には此句もさらばおくれたるか

さらばとよ何と名づけん十七夜月

此句滑稽に似て讀めすと云ふ人あらばいかにせん　(完)

五字のうた

神港　重松老市

生死の道はくらくとも
五字の光明輝けり
大白牛車に打乗りて
法性の空かけらなん

無明の根さし深くとも
五字の利劍はきらめきぬ
不變眞如の都路へ

かちときあけてかへらなん
業苦の病れもくとも
五字の良藥こゝにあり
癒しうれしく見もしらぬ
寂光淨土に遊ばなん

魔障の風はあらくも
五字の大船ゆるきなし
わしねのまゝにのりの海
聲いさましく渡らなん

紅蓮白蓮

壽量の文底

内藤知厚

さてこの壽量の文底といふことは、錄内開目抄上二ケ大事、牧標の段　一念三千ノ法門ハ但タ法華經ノ本門壽量品ノ文ノ底ニ沈メ給ヘリと仰せられた、宗祖上人の御言であります、この文底の御文言に付て、古來より種種の說をたてまして、或は如來如實知見の文底、或は是好良藥の文底、或は如來秘

密神通之力の文底　或は然我實成佛已來の文底、或は壽量品の題號、或は壽量の全文と、かように多說かありますが、皆々文底の御文言に迷惑して滿足な說とは思はれません、中に甚だしいのは、この御文言を使にして、經体の一致、內證の一致を主張した、僻說もありました、りの外とんと眞意を明めずに過ぎす人々が、澤山ある樣に見受けますから、今自分の承知した文底の法門をば、約かに　御談して見たいと思います、

で、文とは壽量の經文であります、底とは底意亦は心底にして壽量の經意であります、則ち自分ともか得脫とし、成熟とし、下種とし、恒に信受したてまつる、一念三千の南無妙法蓮華經は　一片の經の文や句やではありません、經ゝ名義經の文句字に、存蓄せる經の意であります、

錄內十六四信五品抄に、妙法蓮華經ノ五字(非二經文一非二其義一唯一部ノ意耳ゝ)と判せられてありますのは、こゝのことであります、一部の正体たる一念三千の妙法は、經の文義でなく經の意であります、經意と顯はさんとしての經の說義となり經の文字となつたのです、かく曉めますれば、壽量品經の意もわかり、壽量品經の文義も俱に明白になつてくるのであります、この意たる一念三千の妙法を、相從して廣げますれば、たゞに壽量品、法華經一部の意のみでなく、一代諸經の意であります、

開目抄上、次下の文に華嚴乃至般若大日經等ハ二乘作佛ヲ隱スノミナラス久遠實成ヲ說キ、カクサセ給ヘリ此等ノ理々ニ二ツノ失アリ一ニハ存行布故仍末開權トテ迹門ノ一念三千ヲカクセリ二ニハ言始成故尙未拂迹トテ本門ノ久遠ヲカクセリ此等ノ二ツノ大法ハ一代ノ經骨一切經ノ心髓ナリ、迹門方便品ハ一念三千二乘作佛ヲ說テ爾前二種ノ失一ツヲ脫レタリ、シカリトイヘトモイマタ發迹顯本セサレハ實ノ一念三千モアラハレス二乘作佛モサタマラス水中ノ月ヲ見ルカ如シ根ナシ草ノ波ノ上ニ浮フルニ似タリ本門ニ至テ始成正覺ヲヤブレハ四敎ノ果ヲヤフル四敎ノ果ヲヤフレハ四敎ノ因ヤフレ又爾前迹門ノ十界ノ因果ヲ打ヤブリテ本門ノ十界ノ因果ヲトキアラハス此即本因本果の法門ナリ九界モ無始ノ佛界ニ具シ佛界モ無始ノ九界ニ具テ眞ノ十界互具百界千如一念三千ナルヘシと仰せられたこの法門のほどこそ身に心に染んで、ありかたさことであります、此の御文があまり貴さに誰れしも言ひもし書きもしますから、さほど尊重に覺へぬ僻の方もあらぬ限りてもありませんゆへ希くは知る人も不知人も再三四五深讀していただきたい、特に今自分が申しまする文底の法門に與りては一切經の心髓、一部の意　さては壽量の文底と充分の吟味をねがはなければなりませぬ　御文中眞ノ十界互具百界千如一念三千ナルヘシとは壽量品の文の底意であります、この大法は華嚴乃至般若經等にはトキカクサセテ文もなく義もな

し涅槃迹門経にもいまだ義成せず、況して意のあるべきいわれはありません。今壽量経は文義倶に成して底意の大法自から顯れました、さればにや、この品経一切経中にあるかゆへに一切経の心髓といひ、法華経一部内にあるかゆへに一部の意と言給たのであります、

開目抄下　佛久遠ノ佛ナレハ迹化他方ノ大菩薩モ教主釋尊の御弟子ナリ一切経ノ中ニ此ノ壽量品マシマサスハ天ニ日月ナク國ニ大王ナク山河ニ珠ナク人ニ神ノナカランカ如シ

開目抄下　眞言華厳等ノ経々ニハ種熟脱ノ三義名字スラ猶ナシ何ニ況ヤ其義ヲヤ華厳眞言経等ノ一生初地ノ即身成佛等ハ経ハ權教ニシテ過去ヲカタセリ、種ヲシラサル脱ナレハ超高カ位ニノホリ道鋭カ王位ニ居セントセシカコトシ宗々互ニ種ヲアラソウ、予ハ此ヲアラソハス但経文ニ任スヘシ法華経ノ種ニヨテ天親菩薩ハ種子無上ヲタテタリ

開目抄上　日蓮案云二乘作佛スラ猶爾前ツヨニオホユ久遠實成ハ又ニルヘクモナク爾前ツリナク其故ハ爾前法華相對スルニ猶爾前コハキ上爾前ノミナラス迹門十四品一向ニ爾前ニ同ス本門十四品モ涌出壽量ノ二品ヲ除テハ皆始成ヲ存セリ双林最後ノ大般涅槃経四十卷、其外ノ法華前後ノ諸大所経一字一句モナク法身ノ無始無終ハ説ケトモ應身報身ノ顯本ハトカレス、イカンカ廣博ノ爾前迹門涅槃等ノ諸大所理ヲハステ、但涌出壽量ノ二品ニ付ヘキと仰せられましたのは、これ皆本因本果の法門に約して一念三千の妙法を顯示なされた御文であります、かく目愛き壽量品、かく文義倶に明了なる修多羅経なるかゆへに一切の諸経を總して法華経一部に適歸し、法華経一部を總して壽量品の一経に主一適歸せられましたのであります、こゝを以て當御文にうの所詮をとりて壽量品の文の底に沈め給へりと御垂讃あられたのであります、

されは廣博の一化諸経も肝要は法華一部に入り、法華一部は壽量の一経に入り、壽量の一経は終いに文底意たる一念三千の妙法蓮華経となるのであります、

錄内九　法華取要抄　日蓮ハ捨ニ廣略一好ニ肝要一所謂上行菩薩所傳の妙法蓮華経の五字也

錄内八　觀心本尊抄　是好良藥ハ壽量品の肝要名体宗用教の南無妙法蓮華経是也と仰せられました、御文中肝要とは文の底のことです、つまり文の底とは廣略要の諸経ありとも要中の要と指したのです、皮容毛彩の諸部ありとも心髓をいふのです、一文一句の文義ありとも活息せるうの意を申したのです、もしこの意たる、心髓たる　要中の要たる、文底の大法なけねは諸部の經文經義は反古紙同様でありまして佛教とは申しかたいのであります、隨てこの大法を信受しなけねは佛法信仰の人とはいわれません、名けて不信佛法大破戒のものと申すのであります、今時口に經文讀誦し手に釋書繙けは信者の様、學者の様、己れも許し他にも許さるゝ様の風か

ありますが大いなるまちがひ、太だしい廉忽です、なるほど經文釋書の鑽仰は信仰の上にも學術の上にも、あしいものではありません、寧ろはむべきものです、なれとも一代の根底たるうの品物を把持せぬ限りには多岐多端の佛教は反て信仰体の形式を昧まし、百疑萬難は學街鑽仰の方處を逸し、到底圓滿なる佛路に迎ることはできぬのであります、

開目抄下　サレハ觀經ヲ讀誦セン人法華経ノ提婆品ヘ入ラスハ徒ラコトナルヘシ大涅槃経ニ迦葉菩薩ノ三十六ノ問モ此ニハオヨハス、サレハ佛此ノ疑ヲ晴ラサセ給ハスハ一代聖教ハ泡沫ニ同シ一切衆生ハ疑網ニカヽルヘシ壽量ノ一品ノ大切ナルコレナリ

さなきだに一代佛教は、さるほど多端の信仰、百疑の鑽學にして遠く永く終るべきものではありません……必すや鑽學の上には大光明となり信仰の上には大慈悲となり、幾多苦悶の疑難をして按排せられ　消釋せられ、修理せられ、統合せらるべき一大根底の靈法のよりて存するものが、なければなりますまい……この靈法こそ即ち一切經の心髓……法華經の意……壽量品の文底……一切經の骨目……法華經の肝心……壽量品の肝要たる一念三千の南無妙法蓮華經であります

特に佛陀滅後の末代、行證の二益は闕けて教道、また當さに隱沒せんとするの今日、文の底に沈め給へる大白法を信得するにあらすんは、たとい日に法華經一二三部讀誦しますとも彌陀念佛至心に回向しますとも、大日尊三密瑜伽を行じますとも、これみな徒行徒施徒事に飯してしますのであります

錄内三十二　上野殿御返事　今末法ニ入リヌレハ餘經モ法華經モ詮ナシ但ダ南無妙法蓮華經ナルヘシ斯申シ出シテ候モ私ノ計ニハ候ハス釋迦多寶十方ノ諸佛地涌千界ノ御計ナリ此南無妙法蓮華經ニ餘事ヲ雜ヘハユヽシキ僻事也、日出ヌレハ燈火詮ナシ雨降ニ露ハ何ノ詮カアルヘキ嬰兒ニ乳ヨリ外ノ物ヲ養フヘキ歟良藥ニ又藥ヲ加ルコトナシと仰せられましたのは、よくよく思召のあることであります……請ふ十方の諸君、思をこゝにひたし、とかく佛法學びそこなへのない様心得うこなへのない様、信しそこなへのない様にねかひます……幸ひこゝに因緣あるの人々、今身より佛身にいたるまで、よくたもちたてまつる　法華經本門壽量の三大秘法事の一念三千是好良藥の南無妙法蓮華經と受契したてまつるのは、とりもなはさず、一切經の心髓　法華經一部の意、壽量品經の文底を正直正當に明め握きつた御方と申すのであります……

本勝迹劣假名書（承前）

故常樂院日經述

十法界抄云爾前迹門ノ斷惑者如ニ外道有漏斷退スレバ起一以レ久遠一而爲ニ惑者ノ本一也

注云斷惑者マヨヒヲ斷ツト云事也迹門ニテハ能切レ難シ劣リタル迹門ハ本門ノ眷屬トナリ本門ノ威德ヲ請テコソ迷ヒヲ切テ佛ニ成ル心ナリ有人劣レル迹ヲ捨ツヘシト云ヘリ如何答云ヲトリスグレト立テ、兩門共ニ用ルハ世間出世間ニ渡ル也衣類ニハ表ハ勝レ裏ハヲトリタリ是勝劣ヲ用佛檀ヲ見ルニ中ニ題目ハ勝レ釋迦多寶ハ劣リ又余ノ脇立ニ對スレバ釋迦多寶ハ勝レ鬼子母神ナドハ劣ル也汝同シト思テ一致ト立ルハ大僻見ナリ又主ハ勝レ眷屬ハヲトルナリ勝ヲ取リテ劣ヲ捨主トケンゾクヲ一ツ位ト云ンヤアヤマリナリ是ヲ我等門徒ノ一部修行本勝迹劣トハ申也一致云本迹ヲヲケテ本門ハ主君迹門ハケンブクト云證文アリ耶答云妙樂大師云唯以ニ開近顯遠一爲ニ教正主一獨得ニ妙ノ名一意在ニ於此一矣是本門ノ妙法ハ迹門ノ妙法ヨリ大一別ナル事本門ハ主君ト云證文也蓮師云諸經ハ五味法華經ハ五味ノ主ト申法門ハ本門ノ法門也

注云諸經ハ五味ト云フ內ニ迹門ヲ納メ本門ハ主ト遊シ置ルヽ是本門ノ五味主ト申當宗ノ法門ニテ一致ト立レバ主ト非官ト同位ニナス下剋上ノアヤマリ是也如レ此主人モ眷屬ヲ蓮ヲ用ヲベンジケンゾクモ主人ノイセヒヲカレバ位ヲモユヅラル、事也一部修行本勝迹劣ト云我等門家ノタヲバコレナリ一致云觀心本尊抄ノ送狀云在々所々ニ迹門ヲ捨テヨト書テ候事ハ我讀ム所ノ迹門ニテハ候ハズ叡山天台宗ノ過時ノ迹ヲ破テ候也ト云ヘリ是ハ在々所々ニ迹門ヲ捨ヨト有ハ聖人ノ讀セ玉フ迹門ニハ非ト云御書也如何答云二義有リ一ニハ尤ステバ捨劣得勝宗ト可レ申一部修行ノ本迹勝劣ノ立義ニテ知ルベシ尋云天台ハ何ト讀玉フヤ答云迹ヲ面トシ諸法實相ノ理ヲアカムル故也表ハ勝レ裏ハ劣ルヲ迹門勝ルト讀ナリ今ノ時ノ一致實相ノサトリコソ勝ヲ佛ノ壽命長遠ナドハ教相ニシテ劣故ニ迹門正意ノ實相ノニベニカハニテ一致トツクトリサタ皆迹面本裏ノ讀樣也問迹面本裏ト讀タル證文如何答云觀心本尊抄云像法ノ末ニ觀音樂王示ニ現南岳天台等一出ニ現於世一以ニ迹門一爲レ面以ニ本門一爲レ裏云ヘリ是天台過時ト破シ給フ聖人ハ本面迹裏ト讀給フ本迹勝劣明鏡也又三大部六十卷ノ中ヲ能々御覽アレ釋尊御付屬ナケレバ觀心ヲ以テ本迹一体ト立テ本迹不二ト立又實相ノ理ニテ本迹一致ノ釋多シ其一体一致ト讀タル破シ給ハ蓮師自ラ本迹勝劣也是ヲ天台過時ノ迹ヲ破スルト云ナリ一致云御書云一字一點モスツル人アレバ千萬ノ父母ヲ殺ス罪ニモ過タリト云ヘリ迹門十四品ヲ謗スル大罪人也汝蓮師ヲ大罪人ト謗ス既ニ聖人立給所ノ本迹勝劣ヲ我等立ル所也我等ヲヒホウ

ノ人ト云ハヽ蓮師ヲ捨天台宗ト成ベシサテコソ天台宗ノ袋カツキナリ日蓮聖人錄內四十八通ノ內ニ本迹一致ノ南無妙法蓮花經トアラバ一命ヲモカクベシ證文無キ本迹一致ノ南無妙法蓮華經トスヽムルハ妄語罪ノ人師歟對ノヤカラナリ又一義コソ法花誹謗ノ罪人也顯謗法抄云勝タル經々ニ隨ワズ又勝ル由ヲ談ゼバ謗法トナルベキ歟ト云ヘリ又云謗者背也ト云ヘリ本迹勝劣ヲ立ルハ法華經ノ正意ヲ破ハ謗法也法華一部ヲ誹謗スル人ハ一致也一致カ云如是我聞ノ上ノ妙法蓮華經ノ五字ハ即一部八卷ノ肝心亦復一切經ノ肝心ト日蓮上人判シ給然本迹一致也如何答是ニ有ニ二義一今所引ノ御書ノ一部八卷ノ肝心ト有ル故ニ勝劣ナントト云ナラバ一切ノ肝心ト被タ遊間余經モ法華經モ一致歟アヤマリナリ一義ニ云如是我聞ノ上妙法蓮華經ヲバ天台ノ玄義ノ一卷ニ本門ノ妙法蓮花經ト釋シ給ヘリ迹門ノ題目ハ賤而一部ニ不レ通間序ハ一部ニ渡ル ナレバ本門ノ題目ヲヲクベシト思召タル也一致云品々毎ニヨツテ肝心有ト聖人遊タル間本門ハカリニカギルベカラズ答云肝心ノ言ニ勝劣無シト心得タル歟和歌神道外典ニ皆肝心ト云事アリ肝心ト云ハ一ツナリ共外典ト內典トハ一致ナル不可十法界抄云是以至テ本門一則於ニ爾前迹門一加ニ隨他意ノ釋一矣又云壽量品已前ヲバ未顯眞實ニ非ズヤト云ヘリ一致云御書ニ殊ニ二十八品中ニ勝レタメデタキハ方便品ト壽量品ニテ侍リト云ヘリ方便品ハ迹門壽量品ハ本門ナレバ同目出度品ナレバ一致也ト云云答云目出度言ニ勝劣ナキヤ方便品ハ迹門ノ中ニナメデタク壽量品ハ國ノ大王主人ノ如シ法華一部ノ中ニテメデタキ御品也譬ヘバ知行ヲ百石取テモメデタシト云百石ノメデタシト萬石ノメデタシト一ト云ハンヤ名同義異ト申法門ハ妙法ト云名ハ一ニメ義理ハ天地雲泥也妙法ト云ハ一念三千ノ事ニテ候御書云彼ハ迹門ノ一念三千此ハ本門ノ一念三千也天地遙ニ殊也ト云ヘリ迹門法華宗ニ成者ハ猶ノ如シト云フ宗ヨリ帝釋ニヒトシト遊本門宗ニナルベシ乍レ去口上ニテハ仰候共此書人ニ見セ給フナ今時ハ我慢ノ時ニテ諸人惡敷ヒカシ事ノ破ト成候一致ト立ル迹門ハ天台過時ノ法門醉過タル法理ニ候間父母妻子兄弟ニハシキリニ此時節相應ノ本門ニ引入ヌ我慢ノ他人ニハヨリ〳〵スヽメ給可シ報恩抄下云本門ノ本尊本門ノ題目ヲ日蓮始テ弘ルト遊サレ此法門ハ一切衆生ノ盲目ヲ開キ無間地獄ノ道ヲフサギヌ是日蓮ガ智ノカシコキニアラズ時ノシカラシムルノミトアソバシ候已上間トテモ法華宗ニナサバ時剋相應ノ宗ニナシ度候タトヘ智者アリモコノ本門ノ秘法ヲ知ラザル者ハ盲目也是ヲ信スル時ハ盲目ヲ開ク意也

南無妙法蓮華經

慶長十年乙巳八月六日

以上常樂院日經上人述、本勝迹劣假名書は、小納書ヘ富谷檀林在學中、筆寫致候もの、此度統一の求に應し、茲に掲載する事に相成候、古來該書の如きは、門中に於て秘書と稱し、他見を許さゞるものに有之候處、信教自由の聖代の進捗、宗教革命が持てる、節力の爲めに從來制定の墨

暮に切落され、小稿に至る迄々、該書を謄寫致、藏書中の一に數へ珍重致居候樣の次第、但然眞書を謄寫せる寫本を、亦寫致候事なれば、誤字或は謬寫可有之乎と存候、但し宗意宗義の會通には差支へ無之と存候、若し該謬寫書に、訂正の必要有之と認められ候諸賢士は、假令一字一句たりとも、御遠慮なく統一誌上に於て、御訂正の報に接し度希望仕候、

藏書主　憲　洪識

來者不拒

記者曰、左は今春寄送に係るものなりしが、其節紙面の都合上掲載することを得ざりしもの也、

窮衢の塵

鳴流舍主人

近時の所謂文明なるものは富者權門に厚き文明なり　衢窮細民に綠薄き文明なり、唯物文明の進歩に伴ふ器械の精巧は勞働者より其職を奪ひ、文華の發達に伴ふ奢侈の風は窮乏者を擠して彌々途炭に苦しむ、朱門の肉肥馬常に嘶いて榮色の丐徒累々途に滿つ、肉食の者腹常に便々春の夜の短きを消遣の途なきに苦しみ、而して陋屋の内鬚髮蓬々眼凹み頰落ちたるの人秋の夜の長きを猶作業の捗々しからざるにかこつ、嗚呼今の世正理あると云ふ莫れ公道あると云ふ莫れ將亦宗教あると云ふ勿れ强は弱を凌き富は貧を凌ぐ

金殿玉樓の内美酒溢れ粱肉山を成し　歌遠く聞へ媚を賣る

の住人錦繡を襲ぬ、而も寒夜路側兒女に助けられて破琴を彈して衰を乞ふ暮たる女には人飽く迄も其彈奏を貧りきいて而も一文の錢を投ずるものなくして去る、嗚呼彼等悲慘の生涯誰に賴つて乎其不平を愬へんとはする、彼等筆なく辨なくいたづらに不滿を呑んで地下に入る也、法律ありと雖も以て其柱屈を伸べず宗教倫理ありと雖も惠を彼等の頭上に垂れず、

ア、この憐れむべき丐兒に代つて筆となり辨となり絶叫絶嘆上は大慈大悲の佛陀に愬へ下は天下同情の血士に訴へ爲めに其鬱塞を開かしむるものは宗教家にあらずして誰ぞ、奮起せよ日蓮門下の正信教徒、汝が滿腔の心血と萬斛の熱涙を灑いて彼等のために一道の光明を與へよ

萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草
何れか秋にあわではつへき　（平家物語）

とは彼の艶麗花の如き白柏子枝王が太政入道淸盛公の愛を佛（白柏子）に奪はれて熟々世の賴むなきを慨き側の屏風に墨黑々と書き殘して去りたる怨恨の筆に非ずや、醒めよ、翩々たる佳人戈子

花は開き花は落ち、春は來り春は去る、年一年、年は節を追ふて新まり人は年と共に老ゆ、老ゆるが故に人世限りあり、新まるが故に天地窮りなし、悠々たる哉天地匆々たる哉人世、

大觀す、人世五十、一閃電、一石火、大椿の壽亦蜉蝣の朝夕のみ、人生を愛しみ壽を貧るも百年倏忽朝の紅顏夕の白骨、生前の富と云ふ莫れ、死後の名を云ふ莫れ、化して土となりて墓邊の蔓草を肥すのとき赫々たる名何の榮ぞ、北邙一

邊の煙となりて飛ぶの時百萬の黃金何の用ぞ、蓋世の勇、經邦の智、桃花の唇、臥蠶の眉、憑む可らず、誇るに足らず

椽側物語

有若無若阿闍梨

イヤーおいでなさい、何をしてるッて、別に何もして居ないが、此頃少し金が廻て來たから、庭の手入れとうつくりやつて、今日は天氣もよし氣持もよいので、此通り椽側で一服やつて居る分の事サ

ナニ近頃宗門に變つた事は無いかと、別に是ぞと云ふ程の事もないサ、昨年は開宗紀念で騷いだが、まだ時機が醇熟せんと見へて、宗門統一の事業もカラとんと墓が行かんよ、フ、ン時機は來ねば作るべしだと、ソーサうんな事を云ッて昨年力んだ僧正樣が何處かにあつたうだが、それは一時のから威張サ、乃公は凡夫共の云ふ事にとんと重きを置かん方だから、今更力も落さんが、眞受けに受けた先生達は、しよげ反て居るものもあらうよ、

ナンダト、先生で思ひ出したが田中智學のやる事は何でも氣に喰はぬ……研究大會は法螺大會だ……自稱大先生が癪に障ると、おぬしはおかしな事を云ふではないか、何で田中のやる事がうんなに一から十まで癪に障るのだ、まさか宿世からの敵同士でもあるまいし、うんなに頭からケナスものでないよ、うれは田中も凡夫だから、いろんな事をやる中には隨分ぐりぼまもあらう、けれども兎に角渠は熱誠家だ、乃公も渠の熱誠には實に感心してるよ、無論サ、宗教家に熱が無くつてどうする、狂氣じみてると云はれるのは當然よ、乃公だつて世間からは屹度狂人あしらいを受けて居ると自覺してるよ、ナニ　渠は尊大で傲慢で萬事貴族的だと、よいではないか、地躰今の若ひものは餘りに無遠慮過ぎるよ、れぬし達は長幼の序と云ふものも行儀作法と云ふものも、からきし知らんでは無ひか、乃公の前なんかで其坐りざまは何だ　其煙草の吸ひ方はなんだ、茶一つ呑むすべも菓子一つ喰ふ作法も御存しないではないか、他人の批評よりか先づ自己の品性を反省したらどうだ、うんなおぬし達の樣な、だらしの無ひ似而非平民的のもの計りが宗門にうじ〳〵してるから、田中先生弊風矯正の爲めにちとブッてるのよ、うれが分らんで大先生が癪に障るの何のと、譯もなく出鱈目を云ふものでないよ、畢竟今の宗門は一山百文の和尙さん計りだから、其處へ行くと田中君はソーサ確かに大先生よ、うれとも大先生が癪に障るなら、れぬし達一番奮發して大々先生と成たらどうだ、そうして大々先生の資格で以て、田中大先生の鼻柱を折て見てはどうだ、大々先生、大先生、中先生、小先生、丸で岩谷商會の樣だハ、……

ナニ、渠の安心談が氣に喰はんと、ソーサ不惜身命が安心だと眞以て言ふならば、うれは渠はどうかしてると云はなきやならん、けれどもサ　まさかうんな事は渠も言ふまいよ、不惜身命は護惜正法の護惜で正法は別にある、第一義の安心の爲めに不惜身命の立行が要る位は、渠も知り切て居るサ、そ

れでは何で不惜身命々々々と怒鳴廻ると、知れた事よ、今の日蓮宗は不惜身命を實行する程の人物さへ拂底で、丸で骨抜鮪計りだから、先生セッセと其骨を製造してるのよ、おぬしも分らん男だな、ナンダト、渠の本尊論が間違て居ると、ソーサ佐渡始顯の本尊のみに固執して、其他の宗祖の御眞筆と否定するならば、それは甚しき誤迷論と云はなければならん、祖師は決して物數寄に反古の曼荼羅は御認めにならんからな、けれどおぬし達には分るまいが、乃公にはちやんと渠の眞意が讀めて居るよ、聞かして呉れッて、よし〳〵それは外でもないがな、今の日蓮宗の樣に雜乱勸請別勸請をどし〳〵やらかして、丸でブラマ教ソックリの有樣と來ては、殆んと手が着けられんではないか、此現狀に對して斷乎たる改革をやるには、それは並大躰の事では行かんので、無論大々的突飛の激論を以て當るべしサ、だから宗祖の御形木ならば位の調子では迚も駄目だと考へ込んだ先生、寧ろ學者の方面からは多少の非難を受けても、還元歸一の論法で佐渡始顯を振廻して居る分の事サ、渠は割合に咄せる男よ、

チンダ、モー歸るのか、マーよいではないかゆつくりしてもソーカそれでは又近い内に重ねて來たまへ、さよなら、

統一團報

本誌初號よりの主要なる目錄

（承前）

讃讀無量義經……山根顯道
統一團記者に與へて佛教統一を論ずるの書…上田賢正
依正不二……聖應院日生
此經維持偽……小林日至
教法家の責任は此所にもあり……保江裏
日蓮聖人……久保猪吉
座上問答……石濱江東
宗教問題の正路……上田賢正
日蓮上人の安國策……伊藤憲洪
信念成佛論……高田眞學
本化別頭の教判……釋日本
組織的大本尊……主信生
新佛教旗吹者に望む……本多日生
宗教改革の氣運と其文學……北雷道人
道……不新生
内地雜居に於ける晋人の觀察……釋日本
現代の法華宗を論ず……松尾忍水
南無妙法蓮華經……同
讃謗の矢當……風船玉人
愚者に譬らるゝは第一の耻辱……木多日生
日生と星と……釋日本
立宗の大主義……秋葉純一
經典信仰の眞意義……上田賢正

無常を觀じて因果應報を說く……木立院日誓
京都法華顯末……小高日唱
佛教外護の責任……保江裏
奥羽聖本法華宗諸法師に質す……成島虎夫
巡教記事……鈴木章學
斷佛種の罪人とは誰ぞ……釋日本
信念の實跡を論ず……伊藤憲洪
十如是摘讀に就て……井村恂也
日蓮上人主張の安心門を大觀して純他力教の立却地を論ず……上田賢生
各宗對抗議論……木多日生
明治三十二年に餞す……窪田純榮
擯磨國顯本法華宗對各宗法戰顯末……
崇拜心の調整……
日蓮上人の人生觀を研究して人間の重量と人生の眞意義とを論ず……上田賢生
宗義討究に就て……木多日生
予が信仰の變遷を述べて本宗初心の信者に論ず……今成乾隨
宗教と哲學との同異點……原田容廣
何等を中心として佛教改革を叫ぶべきか……みあしろ生
日蓮上人の詩的生涯……小倉豐三郎
駁足立栗園氏著日蓮大士……
晋國宗教の將來を論ず……
法供養……木多日生
法華宗の迷信を列擧して立宗の大義に及ぶ…今成乾隨
能寫爲一人……佛城
我の意義に就て……三上生
聖祖日蓮の國家的宗教……
法華經より觀察せられたる日蓮上人の女性觀を論ず……窪田純榮
宗教統一の新機運……三越路生
婚禮と佛教……佛城生
大學王殿の建設に就て……本多日生
涙ある人は誰ぞ……みこし路生
教法の新生命を枯骨に依て求めんとする…窪田純榮
妙法丸効能記……木寸庵腎
見人覺法の眞意義……井村恂也
寶量品の三身……大津賢淳
法華宗各派改造論……佛城
日蓮上人に對する晋等の研究の態度……みあしろ生
所謂抄要義……木立院日誓
顯日宗の事……釋日本
二種の釋尊……秋葉純一

（未完、次號續載）

●今成乾隨師の名譽　師は開祖最初直建の靈場たる相摸飯田本興寺へ赴任せられてより常に宗門の要職に歷任せられ今現に第一教區宗會議員と布教員に加ふに本宗評議員なるを以て東奔西馳間斷なき身にも拘はらず專ら檀信徒の教導を怠らず更に青年布教と良風會とに盡力せらるゝことを聞き及ひしか今回武藏品川本光寺住職と合意交換せらるゝことに確定せるを以て羽太市之助、三橋金太郎、遠藤濱五郎、飯島孫八の諸氏は茶金襴燕尾及緋金襴七條を寄贈することに決し京都の日蓮宗專門衣商草木伊助方へ注文し愈出來せるを以て去る十二日盛大なる寄贈式を擧行せる由、因に記す該長條は宗祖開祖の定紋を交叉せる織物にして極めて高尚優美のものなりと云ふ今感謝狀を得たれは左に掲く

感謝狀

我か菩提寺住職今成乾隨師は明治三十年一月錫を當地に留られてより茲に七年間這度管長の命により武洲品川本光寺に榮轉せられんとす
師は資性磊落毫も襟幅を修めす一見木强の人なるかを疑はしむ
然れとも其の人に接するや平等博愛を以てし常に信仰と道德とを鼓吹して休むときなし宗教上に於ては專ら迷信を排折して精神の立脚地を示し以て安心立命を與へ社會上に於ては弊習を打破して德化風教に資し青年を指導して智德啓發に勉め遊民を懇諭して正業を奬勵せらるゝ等我等信徒の恭敬渴仰措く能はさる處なり我之を聞く蛟龍遂に池中に潛伏するを許さすと果然今回品川本光寺住職中村日雍師は宗門經綸の爲に交換せんとを奬め管長猊下亦大に此の擧を賛し師は遂に志を決し合意交換の旨を發表せらるゝに至る茲に於てか我等信徒は愛別の情に絶へす唯呆然たるのみ然れとも退て思ふに師は東都の天に於て其の枝能を現はすの機會を得たるは蛟龍の青雲に乘して天に中するか如く又師の前途を祝せさるへからす茲を以て有志相謀り茶金欄燕尾絣金紋七條を寄贈し以て感謝の微意を表す
師亦名譽ありと謂ふべし

○千葉縣教信

本十月一日午後四時より山武郡松之郷本松寺ゑ於て大演說會有之候、當日は朝より雨天の爲め聽衆堂に滿つるわけには參らす候へとも　參會せしほどのものは最も熱心に聽き居候さ、教益少なからすと存候、演題辨士は左の如し

開會の趣旨　住職　横溝　日榮
日蓮主義　朝倉　智鑑
宗祖遺書上に於ける光彩　古定　賢正
千葉縣と信仰　松尾　忍水
法華經の見地　田久保　日城
精神界の調養　井村　恂也

○祝統一創刊一百號

東金下　押立　投

夫れ發心は必ず教化を先にし宗門の隆盛は必ず人材を育成するを以て急とす我邦方今奎運日に隆々文學歳を追ふて旺盛なりと雖も道心微にして邪說暴行共に起り宗教社會亦其の影響を被るもの蓋し少からさるべし前途大に憂ふべきなり故其任に在るもの宜しく黽勉努力各教區の布教員と互に氣脉を通じ一致結合して佛祖の聖旨に則り信徒の風紀を振起し大に信仰界を改良せさるへからさるなり
閣長閣下等率先して統一を發刊し今や號を重ぬる百一號亦大に見るへし其熱心と勉强の度感歎するに餘りあり從て其社會に與へたる功績必ず淺少ならさるを信ず蓋し雜誌は教導者の耳目なり耳目明ならされば以て益するに足らず凡う事業を興すには必ず幾多の困難なかるへからずと雖も閣下等の前途を遮斷する困難は閣下等の熱誠忍耐に抗敵すへからさるや明なり余は不日各派統一に期するを見ん
後五百歳廣宣流布
一天四海皆皈妙法

顯本法華宗

宗務廳布達

告示第十七號　宗内一般

本宗宗務廳ヲ當分ノ内東京府荏原郡品川町元南品川妙國寺中ニ置ク

右告示候事

明治三十六年十月一日

顯本法華宗宗務廳

本宗寺院教師一覽表中左ノ如ク訂正ス

頁	行	誤	正
七	十	太和田	大和田
十	十六	大統學	大學統
十三	四	馬來村田	馬來田村
十五	廿三	九等甲	九等乙
十六	三	「十一等教師森川秀光」の九字削除	
十六	七	十四等	十四甲
仝	十	日董	日董
仝	廿一	十等乙	九等乙
十八	十四	太和田	大和田
仝	十五	栃木	朽木
十九	廿四	大學統	中學統
十九	六		
仝	十	中小	小中
仝	十四	常眞寺ノ所在地大字「高田」ノ二字入ル	
廿六	十三	鈴木	鈴木
廿八	四	野中眞順	猪野貞立
仝	四ノ次ニ左ノ一行ヲ挿入ス		
		坊瀨　妙源寺　十五乙　權學士　野中　眞順	
廿八	十九	「刈谷町」ノ上「碧海郡」ノ三字ヲ入ル	
卅	廿一	口錫	日錫
卅三	初	僧非侶住	僧侶非住
十九	十四	學士補	權學士
二十八	二十一	員部郡	員辨郡
三十三	二十二	削除	
九	十三	「少學統田邊善知」ヲ入ル	
三十三	十五	削除	
仝	十一ノ次ニ左ノ一行ヲ挿入ス		
		神戸市顯本法華宗弘通所　中學統　上田　智量	

廣告

運正會規定に基き前管事野老乾爲師より引續候條本會々費第貳期徵集書送附候節は速に御納付相成度候此段及御依頼候也

明治三十六年十月十二日

當番管事　大橋日襲

第十五教區、第十六教區、第十七教區、

各寺院御中

廣告

我儀管長の命により左記へ轉住することに相成り本月二十一日を以て赴任仕候間爾后用向の御方は左樣御承知有之度此段廣告仕候也

東京府下南品川南馬場町
本光寺住職
僧都 今成乾隨

酒のめず 松尾英四郎

小生に盃をさゝるゝ方は小生の苦しみを喜びなさる道理に可相成候

至急團告

○本誌に寄送の原稿は
東京府下品川妙國寺統一團本部
宛に願候
其他の用向は依然
東京市淺草區南松山町統一團團報部
宛に願候

統一團

編輯局廣告

○本誌寄送の原稿に限り東京府下品川統一團宛に願候、
○本誌の投稿は必ず二十七字詰にて正格に御書きを願候然らずんば誤字誤植の多き道理に候
○御投稿のものは完結ものに願候長編ものと雖總べて完結一纏めの上御送付下被度し
○次號よりは其月四日までに當團着御送付なきものは本誌發行日を遲くれしむるのをうれあるを以て次の月の本誌へ廻し候、かくては記事掲載に付き時期を失すべく不都合と察しられ候へば必ず其月の四日迄に本團着のやう呉々も御賴み申置候
○統一團報に掲ぐべき各地の報告は要領を得易すく御通知を乞ふ
○先師先德の著書消息等御送付を乞ふ

編輯局廣告

岡山

呉服商

柿屋本店

店主 久茂城太郎
（電話二六〇番）

柿屋 蒲團洋傘 店（岡山市上之町）

（電話二六〇番）柿屋太物店（岡山市上之町）

（電話二五五番）呉服卸 柿屋南店（岡山市上之町）

呉服卸 柿屋北店（岡山市東町筋）

（電話一五八番）柿屋鼈甲店（岡山市中之町）

御雛附ぞく小道具 人形

武者人形

東羽子板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店

久月本店

中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

一統

（明治三十年二月廿四日　第三種郵便物認可
（仝三十六年十一月十五日發行統一第百三號　毎月一回十五日）

第百三號目要

○布教學の特置を要するの議……清瀬貞雄
▲久成佛の大慈悲……某　度　寫
○日什大正師傳……忍　水
▲日什大正師傳餘談……同
○思連記（前號承繼）……日　達　遺　稿
▲辻文學士の慶長法論批評……
○秋のあはれ……教　文　會
▲去勢法を執行せし僧侶……
○精神と形体との快樂……清瀬日憲
▲僧侶の妻たる人に。佛教婦人會……
○心の飢を救ふの法……眞　龜　逓　舍
▲明治の座……鴨　流　舍　生
○憤悲語錄……彫　山　議　二
▲儲け主義の演說。治國平天下の法……
○聖祖門下檀信徒に示す……紀　野　俊　耀

佛旗六金色
御寺院御幕調進所
六金色價表
唐縮緬製

種形別	並品製	上品製	新友仙	本友仙	染抜
在家用	廿二錢	廿八錢	卅五錢	五十五錢	
寺院用	四十三錢	五十錢	○	一圓三十錢	
同極大	七十五錢	八十八錢	○	二圓二十錢	

右外別大特大最大數種●國旗本友仙染抜四十五錢
御寺院用御幕●唐縮緬紫幕●天竺木綿及五郎丸白幕
京都市油小路魚棚南
御本山御用調進所　吳服商　高橋正意
（電話千二百八十七番）

荏原郡部及品川町の統一購讀諸君へ

今般荏原郡部及品川町の本誌購讀料の蒐集方を
妙國寺宮　松尾英四郎君
へ頼囑ましたから。已來は必ず同人へ御拂込を願升
一右統一代金は同人か又は同人の認印あるものゝほかは何人たりとも御渡しなきやう頼みます

統一團

品川『統一』購讀者諸君

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
仝三十六年十一月十五日發行統一第百三號　毎月一回十五日）

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞
一雜誌交換、寄稿共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢十二冊前金六十五錢郵券代用は一割增但五厘切手を其とす
一讀讀申込の節は住所姓名を楷書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅六年十月廿五日印刷發行
發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暐學
印刷所　北澤活版所

發行所　東京市淺草區南松山町四十五番地
統一團

發行所　東京市淺草區南松山町四十五番地
統一團